



技術史教育

第144号

2026.1.31

Education for History of Technology

第144号 目次	日本技術史教育学会創立30周年を記念して……………堤 一郎(1)
	日本技術史教育学会2025年度年次大会(東京・町田)開催報告……齊藤 純(2)~(5)
	日本技術史教育学会関西支部2025年度総会・研究発表講演会案内……南正晴(6)
	2024年度受賞者一言・2025年度功績賞・業績賞候補募集……………(7)
	2026年度総会・研究発表講演会開催案内・その他・編集後記……………(8)

【学会創立30周年】

日本技術史教育学会 創立30周年を記念して

会長 堤 一郎 (サレジオ高専 客員教授)

2025年5月26日、書面にて開催された日本技術史教育学会2025年度総会において、吉田喜一前会長の後任として会長を拜命致しました。初代前田清志会長から数えて、第9代目にあたります。

それまで10年間地道に活動を続けた技術史教育研究会から、1995年10月28日に東京・四谷の上智大学で開催された技術史教育学会創立を起点として、2025年10月28日で30年を迎えました。

2025年度の年次大会では、創立当初から交流を続けている日本科学史学会から木本忠昭先生(前同学会会長・東京工業大学名誉教授)、博覧強識の連携から国立科学博物館前島正博先生(同館常務技術史資料情報センター長)、江戸時代の文化の復元を続けている日本チームウェア研究会の佐木三郎氏(同会会長)と、学会の牛耳り先生(元、本学会会長・足利大学名誉教授)の記念講演をして頂きました。故人となられた前田清志先生も、このことを遠くからご覧になられていたことと思います。

20年前の2005年6月に現名称に改称し今日に至りますが、学会創立以来「技術史研究」と「技術史教育」を二本柱とする基本的な方針に何も変わりはありません。これらが揃ってこそ、私たちの学会活動が社会に還元されるのであり、日本学術会議登録申請時の基本事項にもなっています。

これまで多くの会員諸氏による研究・教育両面での情熱溢れる活動に支えられ、ここに創立30周年を迎えられたことに改めて感謝を申し上げます。

実は30年は長いようで短いものでした。創立初期は学会の体制づくりを最優先とし、当時の勝山昭夫事務局長(現、茨城高専名誉教授)の下で、総会・研究発表講演会と全国大会の開催、NLと学会誌の編集・発行(当時は渡辺 武編集委員長・山梨大学名誉教授;故人)、日本学術会議登録申請に向けた諸準備、更に日中間で初めて開催する機械技術史国際会議(北京航空航天大学)への対応、周年行事の開催など、実に様々な事業実施を経て今日に至

りました。この国際会議は日本側が下間頼一先生(現顧問・関西大学名誉教授)と江藤元大先生(千葉大学名誉教授;故人)、中国側が北航大の郭可謙教授(故人)、早稲田大学副教授のご尽力で具体化したことに改めて感謝申し上げます。これらの活動成果は、学会誌や講演集などに取り纏められて残るものが貴重で、学会の知的財産です。

一方で、デジタル化の集大成とされる交通網の整備とデジタル通信網の発展・普及は、多くの人々に恩恵を与えた反面、文明の利器を悪用する事例も後を絶たず、新しく開発され普及した技術が持つ二面性を、日々実感せざるを得ません。こうした社会環境だからこそ、諸先輩が築いてこられた過去の諸事例を改めて振り返り、現在において、将来に向けた新たな方向性を冷静な視点から見出す必要性が求められ、私たち共通のテーマである「技術史」はそのための実に大切な学術分野にあたるのです。

それゆえ「技術史研究」と「技術史教育」の併存と相互の関連性をより一層強固にしつつ、その活動を通して、私たちの生活や文化の継承が更なる充実に向かうことを忘れたくはありません。社会は急速に変化しており、その変化を読み取りつつ、様々な事象を時間軸に留めてこれを着実に記録し、後世に残し伝えていくこと、さらにこれらの成果を、次世代を担う人々に向けて学校や博物館など教育の場において、倫理観と共に還元していくことが、私たちの学会に求められる大きな社会的使命と考えています。

それは技術の進展が人と社会に密接に関わり、このことが「技術史」面では実に大きな存在であり、「技術史」が末永く続くからに他なりません。

学会創立後半世紀にはまだ至りませんが、そこを目途に皆様と共に学術活動を進めて参りたいと思いますので、変わらぬご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。